

編集長 とはいえ、大学を出たばかりでは、金銭的にもきびしかったのではないですか。

山本 もちろん、NPOの活動だけでは生活できなかったもので、06年までは会社員をしたり、アルバイトをしたりしながら生計を立てていました。

編集長 現在、コトバナアトリエでは主にニート、フリーターの表現活動の支援を行っています。そこにはどのような思いがあるのですか。

山本 国は予算をつけて、ニート支援を行っています。ですが、それは農業、福祉、IT、工業といった分野の出口支援に限られています。もちろん、それが悪いとはいえませんが、彼らを持つている可能性はそれだけではないと思うのです。たとえば、マンガ家や作家のような能力を持つていて可能性だってあるわけです。ですから、私たちはそのあたりを伸ばせるような仕組みづくり、社会づくりを行っていきいたいと考えているのです。



クリエイターの卵たちに
「トキワ荘の精神」を伝える

編集長 山本さんは「トキワ荘プロジェクト」ということで、マンガ家

志望の若者に住宅の世話などを行っています。ですが、どういったキッカケでこの事業をはじめることになったのですか。

山本 現在、何かしらの夢を持ちながらも、取り巻く環境のせいで挫折している若者はたくさんいます。とりわけ地方出身者は東京に出てくると、多額な家賃が必要になります。が、時給900円で週5日、1日8時間勤務したとしても、月給は手取りで12万円程度です。これでは、家賃を払って生活していくだけで精一杯です。とても夢を追う余裕はありません。ならば、せめて住宅面のサポートをしてあげれば、彼らの夢はグッと近づくのではないかと考えたのです。

実は、この発想は私の実体験に基づいています。私は以前、空き家になつていた祖母の実家に住んでいたのですが、その家の1部屋を芝居をやっていた友人に貸したことがあるのです。すると、彼は家賃収入を稼ぐ時間を使って、いろんなオーディションに参加するようになりまして。そして、みるみるうちにステッブアップしていったのです。

編集長 なるほど、それがトキワ荘プロジェクトの基本コンセプトになっているのですね。

山本 そうです。マンガ家のようにクリエイティブな職業を目指すには、自分の技術なり個性なりを伸ばせる環境が大事なのです。つまり、キッチンと能力を育成する時間と切磋琢磨できる仲間の存在が重要になってくるのです。そこで、私が思いついたのが「トキワ荘」(※)のイメージでした。トキワ荘のように、ひとつ屋根の下に夢を共有する仲間が、

住めばいいのではないかと考えたのです。となりの仲間が連載を取ったとか、マンガを描いているといったことが自然と伝わってくれば、自分もウカウカしてはもらえませんか。こうして私たちが1軒屋を借りて、そこを複数のマンガ家希望者に低賃金で貸すというプロジェクトをつくりだしたのです。

編集長 現在、トキワ荘プロジェクトには何人ぐらいが参加していますか。

山本 32人の若者たちが参加しています。平均年齢は20代前半といったところ。参加者は女性のほうが男性の倍くらいいますね。

編集長 家賃はどのくらいですか。
山本 一人当たり3万〜5万4000円で、水道・光熱費、インターネット利用料込みです。もちろん、敷金・礼金・礼金・仲介料も必要あり

ません。現在、都内に男子寮を2軒、女子寮を4軒用意しています。とはいえ、事業をはじめた頃はなかなか大家さんの承諾をもらうのが大変でした。とくに男性寮となると、不審がられることもしばしばありました。が、地道に活動してきたおかげで、今ではかなりスムーズに事業を展開することができるようになりました。

編集長 すでにトキワ荘プロジェクトからマンガ家になった人はいますか。

山本 出版社から賞をもらって、メジャー誌で活躍している人はいますね。もう一歩進んで、連載をはじめられるようになれば、おそらくバイトをする必要がなくなるはず。そうなったら、トキワ荘を卒業といった感じになるのではないのでしょうか。

編集長 ところで、若者と付き合うなかで、何か感じたことはありませんか。

山本 自分の限界を突破して、一段階段を上がったときに違った世界が見えてくる、そんな「おもしろさ」に対して、最近の若者は少し鈍感になってきているように感じます。私はその背景に情報化社会があると思うのです。あまりにも予備知識が多

※トキワ荘…手塚治虫、寺田ヒロオ、石森章太郎、赤塚不二夫、藤子不二雄といったマンガ家たちが、駆け出し時代に住んでいたアパート。